

三人の一生

人は生まれてから死ぬまでの一生において、子どもから大人へ、さらに老人へという段階をへて死を迎える。そして、その段階の区切り目において、人生儀礼とか通過儀礼と呼ばれる儀式あるいは儀礼が行われる。一般には、出生・成人・結婚・死亡などで行われるものである。

1 誕生

昔は出産ということは個人または家だけの出来事ではなく、集落という共同体の事として受けとめられていた。そして跡取りという意識が強く、妊娠してから出産、成長に伴う儀式の多くは、第一子のみに行われることが多かった。

(1) 子授け祈願

結婚した夫婦の間で、早く子どもを得たいと思う気持ちは誰でも共通したものであった。家の存続が第一とされてきたころ、早く後継ぎの子をもうけることは義務のようなものであった。しかし、なかなか子どもに恵まれ

なかった場合、さまざまな妊娠祈願が行われる。一般的には、神仏その他に祈願するというもので、子授けや安産の効験があるとされる神社や寺に祈願した。

小城の清水観音や江里山観音、草木田の龍光寺境内にあるニシナハルさん（西の原大明神）にお参りに行く。

(2) 妊娠以後

妊娠してから出産に至るまでは、胎児が無事に成長し安産を迎えるための儀礼が行われる。

帯祝い 胎児の無事と成長、安産を祈る儀礼で、妊娠五カ月目の祝いをいう。嫁の実家から贈られた腹帯（岩田帯という）を、妊婦の腹に巻き、親類や近所の人で祝うのである。戌（犬に通じる）の日に行われるのは、犬

は多産、安産でよく育つということで、縁起をかついで定められたものである。帯を巻くのは、実家の母、姑、産婆など一定しておらず経験を積んだものによって巻かれた。

この日に近所（茶講中）に出産のときの洗い物などの助けを借りる頼み茶講をする。このときの料理の材料は嫁の実家から届けられる。帯祝いをしたことで胎児の存在とその出産を正式に社会に公表することである。



ニシナハルさん 安産守護の神として多久市西の原大明神の分霊をまつたものである。多久邑主の娘林姫の恋は悲しい結末を迎えた。林姫はいつしか、子授け・安産守護の神となった。（草木田 龍光寺）

(3) 安産祈願と産の神

初めての出産は、不安でもあり心配なので、安産を願って近隣の神社や寺にお参りをする。妊娠祈願と同じ神仏で出産後は願ほごきに行く。

出産に際して、産婦と生児の安全を守ってくれるのが、産の神で、あまり意識されていないが、廁神（便所の神）とされている。便所をきれいに掃除しておく、安産であったりきれいな子が生まれるという言い伝えがある。（五）民間信仰と俗信・（一）民間信仰・5家の神の信仰（②便所神）参照

(4) 妊娠中の禁忌

妊娠中の妊婦に課せられる禁忌がある。行為と食物で経験的な知識から言いだされたものもあるが、多くは俗信と思われるものである。

一般的に言われるのは、火事を見てはいけない、葬式に参加してはいけないという禁忌で、もしも見たり参加したりすると、生児に赤ほやけ、黒ほやけができるなどという。まったくの俗信で、妊婦の精神的な動揺を考へてのことであろう。

食物の禁忌としては刺激のあるものを食べると流産するとか、なしを食べると乳が腐るなど、いずれも現在の知識では考えられないことであるが、どうにかして母子とも健やかにと願うことからこのような禁忌を生みだしたのであろう。

(5) 出産

お産の場所 現在では病院で出産することが一般的であるが、かつては自宅で行われていた。産気づいたら、すぐに産婆さんに来てもらい、婚家の納戸（寢床）でゴザを敷いて出産をした。茶講内の女性は、湯沸かせといて、出産時に使用する湯を沸かしたり、アライモン（汚れ物）の手伝いをする。アライモンには三日間ほど加勢に来た。

出産後、切りとられたへその緒は、名前札と一緒に箱の中に入れ、水引きで結んで保存しておく。本人が大病を患ったときに煎じて飲ませると、命をとりとめるといふ。生児には、胎毒を消すためにフキの汁を吸わせる。

後産のしまつ 胎児を分娩した後に胎盤が排出される。これを後産といい、イヤア（胞衣）という。イヤアの処理には注意がはらわれた。父親が屋敷内の恵方に穴を掘って埋め、足で踏みつけ上に瓦を乗せた。埋めた上を踏みつけるのは、最初に踏んだ者を生児が一生恐れるということから、父親の威厳を保つために最初に踏むという。

三日目の夜にテアライブンミヤー（手洗い振る舞い）をした。

(6) 出産後の儀礼

名つけ茶講 生児への名つけは、生後七日目から一〇日あたりに行われる。名つけ親が半紙に名前を書き、神棚や仏壇に供えて披露した。名付けをするのは、一般的には父親や祖父がつけるが、中人や村の有力者に頼むこともあった。

ある家庭では、家族全員で三つの名前を考えて、それを荒神さんにあげた後、お寺にもって行き、上人さんに選んで貰った。男児は七日、女児は一日までに名を付けなくてはいけないとされた。

名づけ茶講といって、紅白の餅を茶講内に配った。この日にテアライブンミャーをすることもあった。
日晴れ茶講 かつて、出産は穢れけがれと考えられ、忌みが晴れるまで産婦と生子は忌み慎む生活が要求された。忌みの期間は初宮参りまでである。男児三〇日、女児三三〇日に晴れ着を着せて神社にお参りし、日晴れ茶講をする。現在は各戸より出産祝い（お金）を持って行く。日晴れに、紅白の餅か、それに代わる物と名前札を配る。

この日までは、忌みの期間であり、初めて外にでて、日に触れることができる日であり、氏神に生児の健全な生育を祈るとともに、氏子入りの意味合いも含まれている。

(7) 初誕生・初正月・初節供

初誕生 かつて、日本では正月ごとに年をとるといって、数え年で年をとっていた。そのため、個人ごとの誕生日を祝う風習はなかった。しかし初誕生だけは特別で、健やかに育ったことを祝って誕生祝いをする。ワラジやゾウリを履かせて餅を踏ませる、餅踏みという行事が行われる。踏ませた餅は、糸で切り親類や近隣に配る。

初誕生を迎えると、将来にかけける期待もあり、その子の将来を占ってみようということも行われた。算盤そろばんや筆、お金などを並べて、何をとるかによって、「百姓になる」とか「商人になる」「学者になる」などと将来を占った。

初正月・初節供 初めて正月を迎えるときには、男の子には破魔矢はまやと弓、女の子には羽子板が母方の実家から

贈られた。

初節供も重要な成長を祝う行事で、女の子は三月三日の桃の節供に雛人形ひな、男の子は五月五日の端午たごの節供に、鯉のぼりや武者人形が、母方の実家より贈られる。贈られた家では、これらを飾りつけ、祝いの膳をもつける。

(8) 子どもから大人へ

現在、十一月十五日を中心としてその前後に行われる、七五三の行事は、近年に行われるようになったもので、かつてはこれとは違った子どもの成長を祝う儀礼が行われていた。いずれも着物を着ていたころの儀礼で、早い時期に消滅したようである。

帯解き祝い 数え年三歳で行う。それまで、子どもには紐を着物に付けて着せていたが、その紐をとって帯で巻くようにすることである。

へこかき・きやーふかき 男児は七歳でへこかき、女児は九歳できやーふかきをする。へこ（禪）、きやーふ（腰巻き）を初めて着けて、実質的な意味で成長したことを証明するものである。



餅踏み 誕生祝いというのは、昔は生後、満一年目の初誕生に限っていた。初誕生はムカワリといって餅をつけて祝う。この餅を踏ませるのがちょうど歩き始める時期なのでそれに伴う俗信も多い。(新田 S59.6.18)



ハツトリ 初誕生を迎えれば、将来にかけける期待がある。具体的に子どもの将来を占ってみようと、無心に手をだす子どもに一喜一憂する。(新田 S59.6.18)

七五三 第二次世界大戦後に、帯解き祝いやへこかき・きやーふかきに代わって一般に普及したのが七五三の祝である。十一月十五日を中心としてその前後に両親や祖父母と神社に参る。

(9) 手伝い

学校に行くようになると、年齢に応じて家の仕事を手伝わされた。農家の男児は農作業の一端を荷なっていた。忙しいときは、学校からの帰り、そのまま田んぼに行くことも多かった。夏は麦刈り、水ぐるま踏み、押し雁爪がんづらを押しての除草、秋から冬にかけては収穫（稲よせ）や稲の株切り、馬の敷藁の入れかえ、飼料の草切りなど。

漁家の男児は、小さなときから親と一緒に、夏はクツゾコ、秋はクルマエビ、冬はマエビ漁などにてていた。昭和の初めごろまでは、魚の獲れるシオドキは、家の手伝いをし、カラマ（小潮）のときだけ学校へ行くようなこともあった。

照明が石油によるランプのころは、一週間おき位の油買いとランプのホヤ掃除と給油などの照明の管理は子どもの仕事であった。また、共同風呂の当番のときは水汲みなど、多忙をきわめた。女兒は主に弟や妹の子守、おかずの煮たきなど、母親の家事の一部を手伝っていた。

最近では労働を通して子どもと大人が接する機会が少なくなり、親が何を働いているのかさえ知らない子どもも多く、労働の厳しさがわからなくなってきた。

2 結婚

結婚は人生における最大の祝事である。かつての結婚は当人二人の問題ではなく、家と家との結縁に重きを置いたもので、双方の家族をはじめ多くの人々に重大な影響をおよぼすものであった。そのため、一定の手続きをへなければならず、さまざま儀礼があった。

現在では、ホテルや専用の結婚式場で結婚式をあげ、そこで披露宴を催し、新婚旅行に出かけることが一般的となった。また、男女が自主的に相手を選ぶ、恋愛結婚が多くなり、仲人が二人の結びつきそのものに関係しないことが多くなった。

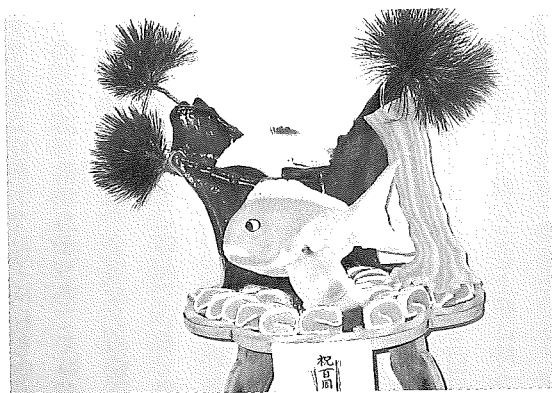
(1) 婚約

婚姻圏 四里四方内ぐらいで芦刈、牛津、小城、大和、嘉瀬、東与賀など近隣の町村が多かった。

婚約 結婚は一生一代の重大事である。口固めとして一生一代にかけて、一升一鯛を贈る。娘の家では親戚を招き、宴を開いて報告をする。婚約にあたるものである。

結納 婚約が成立後、一定の期日をおいて吉日を選び結納が行われる。結納の結（ユイ）は、労働などを共に助けあうことを意味した。

吉日を選んで、仲人夫婦、両親、親戚代表など数人（奇数）が結納金、酒や鯛、野菜、帯などを持参する。娘



スガチャー(寿賀台) 華やかな祝儀に席を飾るスガチャーは、砂糖と水飴を煮詰めてつくったもので、甘い菓子の少なかったころ、祝儀が終わると子どもたちや参加者に配られた。

の方からは羽織袴を贈る。祝宴が開かれ両家がうちとけあう。仲人は両家の都合を聞き、吉日をえらび式の日取りを決める。

(2) 祝儀

道具運び たんす・長持ち・盥・酒・肴・その他諸々の嫁入り道具は、親戚や近所の青年が紋付き羽織袴を着た、率領人を先頭に、たんす長持ち唄を歌いながら婿の家に向かう。(「六民謡・伝説・方言・(一)民謡 3 たんす長持ち歌」参照)

行列が婿の家に到着すると、数人の男が待ち受け、両手を広げて制止する。唄を所望ということになり、歌わないと、道具は受け取れないということで、ここで唄のやり取りが行われる。ひとしきり、やりとりが行われて、唄が終わりとなり、道具が納められる。

座敷で道具運びの慰労の宴が開かれ、歌の上手を褒められ、丁寧なもてなしを受ける。

祝儀

祝儀の前日に実家で娘別れをする。

当日、嫁の里では親類や友人が集まり別れの小宴を開く。家

族と別れの宴をサシタテ(ウツタチゴゼンとも)といって、盃を酌み交わす。出立の時間になれば、仏前に嫁入りの報告をし、仲人に先導されて婿の家に向けて出発する。近くの場合は歩いて行くが、遠くの場合は、車が登場する前は人力車でいっていた。

嫁入りの行列は、婿の家の手前で中宿をとり一時休息をする。中宿は前に行われている友人振舞いなどの宴が終わっていないときの時間調整や花嫁の道中の疲れをいやし、これから始まる婚禮の準備を行うのである。

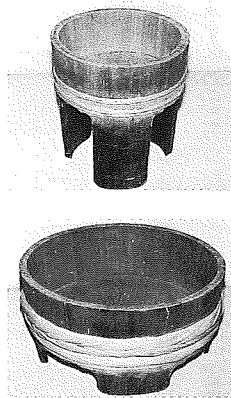
嫁が婿の家に近づくと、嫁の尻つねりという悪戯をしたり、キンドサキ(家の前の道)で藁を燃やしたりする。火を燃やすのは照明のためではなく、火に関する儀礼的なものがあつた名残と思われる。

嫁が敷居をまたぐとき、鍋蓋を頭上にかぶせる鍋蓋(釜蓋)かぶせが行われる。カマヤの神、荒神に仕える儀式である。(「五民間信仰と俗信・(一)民間信仰・5家の神の信仰・(1)荒神」参照)婿方の家にはお祝い物が届けられているが、その一つにスガチャー(寿賀台)がある。砂糖でつくった祝い菓子で、翁や媪、鯛などめでたい物で、友人や親戚などから贈られる。後で子どもたちに配られる。

夜も更け、一二時ごろから祝儀が始まる。



ザッシヨキびり 昔は野菜も結納品の一つであった。野菜は二人の仲が長く根づくようにと、レンコン、大根、ゴボウなどの根菜が多い。これを縄でしばり、先端を角のように立てて、扇やノシ、水引きで飾りつけたものです。(中副 土井宏成氏提供)



手洗い桶と盥 盥は出産時や洗い物にかかせないものであつた。(徳久 佐賀県立博物館蔵)

ザシキ（座敷）では、床柱を中心に仲人夫婦の間に婿と嫁が位置し、左右に両家が分かれて座る。仲人の挨拶の後、お誂三番があがって、夫婦盃（三三九度）を幼い男女児が男蝶、女蝶（おちよ、めちよ）になって行う。盃事に用いる銚子（ちようし）や瓶（びん）の首には紅白、金銀などの蝶花形に和紙の飾りがつけられ、雄蝶・雌蝶と呼ばれたことから盃の受渡し役の子どもを同じように呼んでいる。婿方の甥や姪などの小さな子どもが務める。男蝶の盃を新婦の身内に、女蝶の盃を新郎の身内にまわし親類の絆を結ぶ。

式が終わると酒宴になり夜明けまで続く。酒宴に芸者がつくこともあり、たいへんな賑わいであった。祝儀の翌日は隣近所へ嫁の紹介祝いが行われる。夜は婿の仲間への披露でやはり夜明けまで続く。

(3) 祝儀後の儀礼

里帰り 初歩きともいう。三日目、一週間以内と家によって異なる。土産は酒と魚などを持って帰る。小姑がいるときは、下駄などを土産に持って帰った。

3 葬送

生を受けた人間は必ず死を迎える。平均寿命がのびたとはいえ必ず死ぬということは事実であり、これは誰にも避けることができない運命である。

葬儀は、その人が信仰する宗教（仏教・神道・キリスト教など）によって行われる儀礼が異なる。さらに仏教

の場合、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・曹洞宗・臨済宗などの宗派の違いによっても異なる。現在ではほとんどの場合、自宅や斎場で、葬儀業者が取り仕切って行うというのが一般的である。

(1) 死の予兆

カラス鳴きが悪いと死人がでるといふ。カラスの鳴声が異常に聞こえるときをいうのであろうが、鳴いているときは大丈夫だが、鳴き止むとトロクのかぶつとうといった。死神がついていることをいふ。

(2) 通夜

末期の水 臨終にあたって、近親者が死者の口に綿などで水を含ませてやることである。臨終の人間の口元の濁きを癒すというよりも、この世に魂をつなぎとめようとする観念が含まれているのであろう。

枕 飯 息を引き取ると、すぐに北枕にして寝かせ、ご飯を炊いて高盛りにして箸を立て死者の枕元に供える。これを枕飯という。

通夜 死んでから葬儀までの夜に死者の家で親戚や近隣、知人などが香典を持って訪れ、僧侶の誂経が行われ死者を弔う。故人の思い出話などに触れながら、身近かな人のほかは頃合いを見計らって辞去する。カドウチ（小路・折ともいう）の人々は葬儀の段取りと役割分担を決める。

近親者は死者のそばで過し、線香やロウソクの火を絶やさず、猫を死者の近くに寄せつけない。通夜は、近親者が死者との最後の夜をとにもするというのが本来の意味である。

(3) 葬式加勢

葬儀には多くの人手を要した。死者のでたカドウチの人々で構成された葬式組が、家族や親戚に代わって葬式についての一切の任務を受け持つ。男加勢人は役場や寺への手続きを始め、骨折りといいクボ掘り(墓穴掘り)と料理材料の買い物、死の連絡などの使い走り、女加勢人は食事づくりをし白着物を縫う。白着物は死者に着せる装束で、サラシのジバン(襦袢)で、手尺ではかり糸尻を止めないで縫う。

死の連絡には必ず二人でかけた。電話などの通信手段のないころは徒歩か自転車での連絡で大変であった。各家を廻って米を抜き、大鍋で、とうふ、こんにやく、れんこん、大根などで精進料理をつくる。葬具づくりとして、竹を伐つてきて、白紙を巻いて四門六道や旗竿をつくる。

土葬のころは墓地でのクボ掘りが一番大変であった。四、五人がクワとスコップによる手掘りで、穴の中は狭く一人しかはいれず、古い棺や人骨もでてきた。俗信として、カメの中の澄んだ水を飲むと肺の病に効くと言われた。このように大変なので、特別な膳(馳走)がもつけられた。

(4) 湯灌・入棺

死者を棺に納める前に、ぬるま湯で体を拭くが、これを湯灌という。血の濃い近親者で行う。湯灌の湯は逆さ水といって、水をたらいに入れ、それに湯を注いで作る。また、湯を入れる杓ひやくを持つ手は左手で行う。使った後の湯は日の当たらない所に流す。

入棺も血の濃い近親者で行われる。死者には旅装束として、白着物、手甲、足袋をまとわせ、合掌させて数珠

を持たせる。棺は土葬が行われていた頃は、カメ棺を用い、座棺で死者は動かないようにワラやクスの葉を敷きつめた。ふたは板をはめて、スリバチをかぶせた。のちに杉の木の六角や八角の棺となった。

(5) 葬式・野辺送り

僧侶の読経のなか、次々と焼香が行われ、式が進められ、その後に出棺となる。寺まで家族・親戚一同で行列を組み、カドウチの人々が白旗、ドンス旗を立てて、ガンダイ(棺台)にカメ棺をのせて運んだ。

(6) 忌み明け

人の死後四九日間を中陰ちゆういんといい、遺族は忌みの生活に服さなければならない。初七日しよなぬか、二七日ふたなぬか、三七日みなぬか、六七日むなぬか、七七日ななぬかと七日目ことに供養が行われた。

七七日は、忌みあけて、仕上げ供養といい、盛大に行われる。料理には魚介類も使われる。四九日が三ヶ月にまたがるときはこれを嫌って、二ヶ月以内で終わるように短縮した。供養の費用は家によって異なるが、初七日は故人の家が、二七日は親戚が持つなどとされた。

喪に服することを「ヒカブリ」といった。農作業は葬式の翌日でもよいが、祝儀は四九日、あるいは一周忌はいけないとされ、神参りは三年間ぐらいいいけないとされた。

ところで、最近では死のけがれを強く観念することがなくなり、生活の忙しさともあいまって、初七日、さらには葬式当日に短縮されて、忌み明けが行われるようになっていく場合が多い。

(7) 年忌

四九日の中陰が過ぎると、百カ日・一周忌と続き、三年忌(回忌とも言い換える)・七年忌・十三年忌・十七年忌・二十三年忌・二十七年忌・三十三年忌の法要が行われる。死者の霊魂は年数をへるにしたがって清まっていき、やがて祖霊となる。

祖霊となった先祖の霊は、毎年、正月や盆、彼岸に子孫の家を訪れて家の繁栄を守護するといわれる。

4 年祝い・厄年

人々はある一定の年齢を災難、病気、怪我などに見舞われやすい年として慎み、その災厄をまぬがれようとする。一方、長寿を祝う年祝いも行われる。

(1) 厄年

特定の年齢を厄難のある年として忌み慎むということがある。いわゆる厄年で、ある年齢に達したときに、病気や災難、怪我などに見舞われやすいとして、その災厄をまぬがれるために忌み慎む風習である。今日では男子

が二五歳、四二歳、六一歳、女子が一九歳、三三歳、三七歳というのが一般的で、このうち男子四二歳、女子三三歳を大厄と称している。これにはその前後の年も含めて、男子であれば前厄(四一歳)、本厄(四二歳)、後厄(四三歳)として、この三年間を最も慎まねばならないとされる。

四二歳は「四二(死に)」、三三歳は「三三(散々)」に通じるとか、語呂合わせによって人生の大厄とする所が多いが、この年代は身体的な変化が生じやすく、社会的にも家庭的にも苦勞が重なる、そうした年回りを大事として、それを無事に乗り越えられるように儀礼が行われるようになったのである。

女子の大厄については、男子ほど意識することなく派手な行事は行われない。厄年の捉え方は個人的意識が強くさまざま、大厄の年は結婚を避けたり、厄年のときに生まれた子どもにも親の厄が影響するともいった。

一方、厄年の本来の字義は「役年」という説もある。男子が四二歳ごろになると集落における年齢階級において、重要な役目につく位置に当たるとされることがからである。神役につけば、その為に物忌みをなすべき年という風に考えられた年ではなからうか。

女子においても三三歳ごろは、一家を切り盛りする主婦の座を姑より譲り受けるころであり、女子の厄年も人生の大きな節目であったといえる。

厄年にあたると、種々の厄除けが行われる。一般的には厄除けの効験があるとされる神社仏閣に参拝したり、三夜待ち仲間が参拝して厄よけの神札を受けてくることもあった。親戚・知己・近隣を招いて、厄落としのための宴席を設ける風習もある。旧正月、二月一日などに、もう一度正月の祝いをして、一つ年齢を加えて、厄年を過去のものとするという方法もとられた。六月一日には清水観音に厄除けの願掛けに行くこともある。



ソトバ 供養追善のために墓に建てられる。上部を塔形にした細長い板で経文や戒名が記されている。(草木田 龍光寺墓地)

(2) 年祝い

いまは、「人生八〇年」といわれるが、少し前までは「人生五〇年」といわれていた。現在、行われている長寿の祝いは、平均寿命がさほど高くなかった時代に決められたものである。六一歳の還暦、七〇歳の古希、七七歳の喜寿、八八歳の米寿など。これは、近親者が、高齢者を祝福するとともに、その長寿にあやかるための年祝いとされるが、本来は厄年に連なる儀式であった。これらの儀式は、現在ではよく行われるようになったが、以前はあまり一般的ではなかった。そうした中で、比較的行われたのが還暦であった。還暦は、六〇年で生まれた年と同じ干支に還ることからこの名がある。一般に赤い頭巾やちゃんちゃんこ、座布団などを贈って祝う習慣がある。

古希は唐の詩人杜甫の「曲江詩」にある、「人生七〇古来希」という一節から名付けられた。喜寿は「喜」の字が草書体で「七七」と書かれるところから、米寿は「米」という字を分解すれば「八十八」となることからその祝いをいうようになった。

いずれも子どもや兄弟が祝ってくれる。米寿のときは記念として一斗杓（トカキ）のトカキ（斗掻き）が本人から贈られる。トカキは杓に盛った穀物を平らに掻きならす道具であり、永年（はか）量り続けてきたということ、年を重ねた意味が含まれている。

四年中行事

年間を通して毎年きまった時期に繰り返される行事を年中行事といい、正月と盆を中心を生産生活のリズムにあわせた行事が行われる。例えば農村の場合、種蒔きから収穫にいたる生産過程における折り返し目に神を祀ることによって生産の順調を祈願するというのが基本となっている。これら行事の行われる特別なハレの日は神を祀り静かに忌みつつしむ遊休日であった。

明治二十一年に政府が行った『農事調査』の「一カ年休業日」という項の佐賀郡を見てみると「一年中休業日ハ挿秧後二日其他元旦盆会節句等凡ソ三十二日位ナリ」とある。隣の小城郡では「一年中農家休業ノ日ハ各地区々ナリト雖トモ旧暦元旦盆会節季及ヒ村社祭日挿秧前後数日ヲ常トス。又旧暦四月朔日ヨリ八月朔日迄五日間毎ニ半日ツ、休業スル村落アリ」と記されている。また明治四十二年四月二十六日の佐賀新聞の記事「農業労働者の休業日」に「農家に休業日なるものを設け、身心を休養慰勞せしむる方針をとりつつあるが、佐賀郡は春夏秋冬の別なく太陰曆に依り其日数は年始盆祭各三日づ、毎月朔日十五日各々一日づ、五節句各一日づ、氏神祭禮日産土祭各二日づ、にして往昔と趣きを異にするものは中流以上のもので三大節各一日づ、休業」と記されている。このようなハレの日は心身を清浄に保つことが必要であったので土をいじったり、下肥を扱うことは禁じられていた。「ふゆう坊の節供働き」ということわざがあるが、普段怠けている者が、節供などの神祭りをすべきハレの